

保育活動のなかの「おはなし」

－「星のひとみ」を題材として－

浜野 兼一

本稿は、就学前の子どもにおける「おはなし」の意味づけや役割について、保育活動との関わりに着目しながら考察するものである。

「おはなし」というと、テーマにもとづいたストーリー展開を言葉により受け手側に伝える行為、というとらえかたが一般的であろう。本稿でもこの定義に従い、絵本や紙芝居を使った読み聞かせは「おはなし」と考えないこととする。これらを踏まえると、「おはなし」とは、長年にわたり多くの人によって語り継がれてきた言い伝え、民話、寓話、昔話といえよう。

では、就学前の子どもにとって、「おはなし」とはどのような意味を持つものなのだろうか。

例えば、家庭では、親との言葉を介したコミュニケーションや子どもの知的好奇心を刺激するものである。一方、保育活動では、集団生活のなかで保育者との関わりや信頼関係を深めるきっかけとして「おはなし」は欠かせない。家庭、園、その他の生活場面において、子どもは周囲からの言葉による働きかけを受けることで知的能力を活性化させ、心身共に成長していく。子どもを取り巻く人的環境による子どもへの言語的働きかけは、保育の場以外でも意図的、無意図的に行われるものであるが、「おはなし」は明確な意図をもって行われる言語的働きかけといえよう。

以上を踏まえて、本稿ではフィンランドの民話「星のひとみ」を手かがりとして、保育活動における「おはなし」を保育の実際場面にあてはめて考察を試みる。

1. 「星のひとみ」の誕生とフィンランド

本稿で取り上げる「星のひとみ」²は、フィンランドのザカリアス・トペリウス(1818-98)³による作品である。

この作品は、1865年に発刊されているが、当時フィンランドは、国家として独立しておらずロシアの治世下に置かれていたことから、トペリウス自身フィンランドとしての文化的アイデンティティの形成にも目を向けながら創作活動に取り組んだと言わ

れる。また、フィンランドは、ロシアによる統治以前において、スウェーデンの属領であった。こうした状況から、フィンランド文化の背景には、スウェーデン文化の影響も随所に見受けられる。

一方で、「星のひとみ」が生み出された当時は、フィンランドにおけるトペリウス自身の社会的地位が確固たるものになっていく時期でもあった。例えば、ヘルシンキ大学においてフィンランド史や北欧史の教授研究に従事、芸術家協会会長への就任要請などが挙げられる⁵。

19世紀以降、フィンランドにもたらされた民族国家主義は徐々に成長してゆき、その展開はロシアからの独立を目指すという明確な目標となってフィンランド人の心に芽生えていった。フィンランドの民族国家主義を表す次のような言葉がある。

「我々はスウェーデン人ではなく、ロシア人になりたくもない。我々はフィンランド人になりたいのだ」(アドルフ・イヴァール・アルヴィドソン)

この言葉は、フィンランド独立の信条として運動家のみならず様々な機会に用いられるようになっていった。こうして、フィンランドにおける民族国家主義の高まりは、1917年12月6日に発せられたロシアからの独立宣言として結実する。

2. 「おはなし」の環境を整える

本節では、「星のひとみ」の内容に基づいた「おはなし」に入る前提として、「おはなし」全般から、環境設定、整備のポイントを確認しておく。

「おはなし」は、それを「語る」者と「受ける」者が存在することによって成立する。これを保育の場にあてはめて考えると、「語る」側が保育者、「受ける」側が園児ということになる。「おはなし」は、園の内外を問わず保育活動のさまざまな場面で活用できるアプローチであるが、保育活動の計画、目標や「おはなし」を行う保育者が、なんらかの意図をもって実施する場合には、その意図を園児に伝えていくための準備としての環境設定や整備が必要となる。

まず、保育者は「おはなし」をはじめの前に、受け手側である園児の状況をみながら、これから進めようとしている「おはなし」がスムーズに展開できるよう声掛け等を行って園児のレディネスを確認する。

次に、「おはなし」として取り上げる題材やテーマに関する情報を前もって園児に伝

え、イメージが膨らむよう導く。こうした手続きを踏まず、園児に何も与えない状態から「おはなし」をはじめのやり方もあるが、保育における「おはなし」の効果をより高めるため、事前の情報伝達によるイメージ形成は必要と考える。

園児は、「おはなし」を通して知らない世界と出会う。この出会いによって、園児の興味・関心、好奇心を刺激する。ただ、この「出会い」は、「おはなし」である以上実際の経験ではない。ここに、園児が自ら行うイメージ形成の大切さがある。保育者として意図すべきことは、ほとんどの園児が十分なイメージ形成力を有していない、ということである。加えて、保育者側から園児がどれくらいの状況をイメージ形成できているかは、正確に把握することはできない。

ここで重要となるのは、保育者の存在である。「おはなし」に出てくる場面や状況は、ほとんどの場合保育者が「園児よりも」直接経験、間接経験があり、または熟知しているものである。こうした経験、知見を、経験したことがない園児に保育者がどう伝えるか、様々な言葉や表現を駆使することによってどのように伝えるかが、園児のイメージ形成の助けになる。

3. 「おはなし」の実践

本節では、「星のひとみ」の内容を使った「おはなし」について、場面、内容、語り手の諸状況など実践的側面から検討する。

保育活動のなかで、「おはなし」を行う際には、語り手である保育者が、その題材となる内容を覚えることが大前提となる。そして、内容を「覚える」ことと並行して、覚えた内容、ストーリーを声に出して「語る」練習が不可欠となる。表1に示したのが、「星のひとみ」を題材とした「おはなし」の場面展開である⁶。

表1 「星のひとみ」のストーリー展開からみた「おはなし」のポイント

場面、内容	語り手の「動き」	「語り」の留意点
タイトルの紹介	顔、視線を園児に向ける	ゆっくり、ていねいに
むかしむかしあるところの、クリスマス・イブのできごとです。雪山のなかをトナカイの引くソリが走っていました。	表情豊かに、例えば、冬の寒さを意識した表情をみせる	クリスマス・イブ、雪山、トナカイのイメージができるように例を示しながら語りかける

<p>ラップ人が大勢乗っている大きなソリが前を進み、小さなソリが引っ張られるかたちで進んでいました。</p>	<p>手の動きなども織り交ぜながら、ソリの進む場面のイメージを伝える</p>	<p>ラップ人の説明は、簡潔に行う</p>
<p>小さなソリには赤ちゃんを抱いたお母さんが乗っていましたが、そのソリの一行に、突然現れたオオカミの群れが襲いかかったのです。 そのとき、オオカミに驚いたトナカイが急に走り出したため、ソリは激しく揺れ一人の赤ちゃんをふり落としてしまいました。</p>	<p>からだの動きをうまく使って、赤ちゃんを抱いたお母さんの役を演じる</p>	<p>オオカミが襲いかかってくる場面では、擬音語とともに、大きな声で表現する</p>
<p>寒い夜、雪の中に落ちてしまった赤ちゃんは、身動きすることもできず、ただ一人で夜空にきらめいている星を見つめることしかできませんでした。</p>	<p>ここでは、赤ちゃんの役を演じて、表情もそれに合わせたものにする</p>	<p>赤ちゃんが心細くなっている状況を悲しそうな声色で語る</p>
<p>それからしばらくして、夜空にきらめいている星の光が、赤ちゃんのひとみに宿ったのです。 そのときです、偶然、雪の中にいる赤ちゃんのそばをお百姓のソリ通りかかりました。</p>	<p>「星の光」のイメージを両手で表現しながら</p>	<p>突然起こった出来事(お百姓に助けられた)で、希望がわいてくる語りに</p>
<p>お百姓は赤ちゃんを拾って家に持ち帰ると「クリスマスプレゼントだよ」と、おかみさんに渡しました。 「まあ、なんて可愛い赤ちゃんなの？それに女の子だわ。わたしたちには男の子しかいないから、妹ができて喜ぶでしょう」 その赤ちゃんは、とても美しいひとみを持っていたので「星のひとみ」と名づけられました。</p>	<p>セリフに合わせた手やからだの動きを工夫する</p>	<p>ここでは、赤ちゃんを拾ってきたお百姓と、おかみさん、それぞれのセリフのところを、声色を変えて表現する</p>
<p>“星のひとみ”が3歳になったころ、母親はこの娘の目が特別な力を持っている事に気づきました。外に出れないほどの吹雪のなか、“星のひとみ”が外へ出ると、吹雪が静まったり、母親の指輪を盗んだ男が口の中に指輪を隠していたことを見抜いたり…</p>	<p>なにかに気づいて、ちょっと驚いている表情をみせる</p>	<p>この場面にセリフはないが、ストーリーが転換することを考慮して、「なにに気づいたんだろう」「すごいねえ」「ふしぎだねえ」などの脚色を交えて進めてもよい。</p>
<p>不思議だなあという思いを表現する</p>	<p>不思議だなあという思いを表現する</p>	<p>不思議だなあという思いを表現する</p>

<p>そんなことが何回かあったことで、母親は“星のひとみ”を気味悪く思うようになったのです。母親のこの思いは、やがて“星のひとみ”への恐れとなっていました。</p> <p>その年のクリスマス・イブの事です。</p> <p>“星のひとみ”を母親が恐れていることを知った隣のおかみさんが、「あの子を、わたしによこせば、わたしがラップ人の国に、帰してやるよ」と言ってきました。</p> <p>こうして、隣のおかみさんは“星のひとみ”を連れ出し、雪山に彼女を置き去りにしました。「雪のなかから来た子だから、雪の上で死ねばいい」</p> <p>その夜、家に帰って“星のひとみ”がいなくなったこと知ったお百姓は、おかみさんから事情を聞くととても怒りました。</p> <p>「なんてことをするんだ。貧しかった我が家が豊かになり、家族が病気もせずいられたのも、金の指輪が戻ってきたのも、全部あの子のお陰だったのに」</p> <p>「確かに、その通りだわ」</p> <p>お百姓とおかみさんは隣のおかみさんとともに、ソリで“星のひとみ”が捨てられた場所に行きましたが、そこにはすでに“星のひとみ”の姿はありませんでした。</p> <p>そして、その帰り道、隣のおかみさんはオオカミに食べられてしまいました。</p> <p>“星のひとみ”はどこへ行ってしまったのでしょうか？それを知る人は誰もいません。</p>	<p>この場面では、一転して心配、不安、恐れなどが伴った顔つきを演出する</p> <p>この場面で、ストーリーの最初場面と同じクリスマス・イブとなっている。ここでは、場面の状況に合わせて、より重々しい冬の情景をイメージできるような表し方をする</p> <p>この場面では、“星のひとみ”がいなくなってしまった驚き、悲しみ、怒りが、セリフの展開に重なるよう配慮する</p> <p>“星のひとみ”をさがしに行ったがみつからなかった、という事実に対する残念な気持ちと、隣のおかみさんがオオカミに食べられてしまったという恐怖がイメージできるような表情を演じる</p>	<p>隣のおかみさんのセリフは、悪人の態度、口調を意識しながら、ゆっくりと語る</p> <p>お百姓のセリフは、驚きと怒りの感情をこめ大きな声で、力強く表現する おかみさんのセリフは、なにかに気づいたかのよ うな口調で表現する</p> <p>この場面に登場人物のセリフはないが、「“星のひとみ”はどこへ行ってしまったのでしょうか？」については、園児に問いかけるような語り口がよい</p>
---	---	---

おわりに

以上、本稿では、就学前の子どもにおける「おはなし」の意味づけや役割について、「星のひとみ」(トペリウス)を題材として取り上げ、保育活動の実践的面にも関連づけながら考察してきた。

保育場面での実践という点からまとめると、「おはなし」は、保育者が園児に対して行うストーリーの展開について、それを進めてゆく手がかりが、絵本や紙芝居のような状況になっていないのが大きな特徴となっている。

このことから、保育者自身の力量と準備によって、「おはなし」が園児にとって良いものとなるのか否かが左右されるといえよう。つまり、題材の内容を完全に覚え、それぞれの場面をいつでもイメージできる。これができないと、「おはなし」を受ける側の園児も、場面展開の意味やその世界を十分に享受できない。保育者は、「おはなし」の場面や内容を途切れることなく進められるよう練習、準備をする際、語り手としての動作、演技、「語り」の留意点を十分に確認しておく必要がある。

実際の保育活動で「おはなし」を行う場合には、保育者が何役も演じながらも園児の反応や表情によって、即興的に展開を調整することも念頭におくことが大切であろう。

1本稿では、「おはなし」を語り手による声、表情、動きなどによるパフォーマンスと定義する。

2原題は『Läsning för barn』(1865)。

3作家であると同時に詩人、ジャーナリストとしても知られるトペリウスは、哲学博士の取得(1844)後、高校の教師、ヘルシンキ大学教授(学長まで昇進)、晩年には、スウェーデンから褒章を受けている。

4フィンランドのアンデルセンとも称されるトペリウスは、文学を通じての文化的アイデンティティの形成を目指した民族運動にも尽力している。

5フィンランド人の存在を際立たせた歴史小説の執筆により、トペリウスに対しては国民的歴史学者という評価が高まり、それが、大学におけるフィンランド史の教授研究等につながったと言われる。

6実際には、「おはなし」を受ける側の園児が、未満児なのか3～5歳児なのかによっても、その発達の特徴や生活状況、個別的な文化的環境を考慮する必要がある。

7スカンディナヴィア半島北部の北極圏内付近に居住する人々。